

健康づくりは大学づくりの重要課題

滋賀大学長 成瀬 龍夫

滋賀大学保健管理センターが昭和 53 年に設立されてから、このたび 30 周年を迎えました。本学は、新制大学創立以来 60 年を数えますが、センターはその半分の歴史を歩んできました。センター所長は、初代の小林健吾教経済学部授以来、山岸司久、佐藤比登美、門政男、林正の各教授が歴任され、現在は山本孝吉教授が第 6 代目の所長として重責を担われています。この間直接間接を問わずセンターの業務を支え、貢献していただいた多くの方々にお礼申し上げます。

新制大学スタート時には、学生の栄養失調による健康不安が最大の問題でしたが、彦根地区には保健婦が赴任しておらず、教導部（学生部）職員が救急箱をもって走ったといったエピソードが伝えられています。昭和 41 年に文部省が、「大学における保健管理を集中的・一体的に行い、事故発生以前に学生の身体的・精神的問題を把握し、未然に疾病による修学中断を防止する」という趣旨で国立大学への保健管理センター設置方針を打ち出しました。これによって、本学も含め国立大学の学生・教職員に対する保健管理はめざましく発展することになりました。

平成 16 年に国立大学が法人化されてからは、保健管理センターの業務を充実させ、学生・教職員の健康づくりをすすめることは、大学づくりの重要な課題の一つになっております。

しかし、リスク社会と呼ばれる今日の社会環境と健康問題の変化の中で、大学に課せられた課題は決して軽いものではありません。

学生・教職員の疾病・傷病の構造が複雑で多様化してきました。結核、HIV、はしか、鳥インフルエンザなど、新旧の感染症の予防が大学の保健活動の恒常的課題となっています。大学生が「青白きインテリ」といわれたのは昔々のこと、学生諸君と教職員はいまや「メタボ」なる症候に悩まされるようになりました。学生諸君のメンタルヘルスも、ひところいわれた新入生の「5 月病」などと異なり、不登校問題などが目立つようになっています。今日では、学生諸君の修学中断を防止するうえで、メンタルヘルスケアの重要性がきわめて大きくなっています。

近年、こうした事態に伴って、健康診断、心の悩み相談、感染症予防、病気への正しい知識と保健意識をもたせる指導など、センターの業務量が目立って増大し、業務の質の面でも一段と高い質を求められるようになっています。センター所長・職員の方々の日々のご苦勞は並大抵ではないと思われま。

30 周年を機会に、健康づくりは大学づくりの最重要課題の 1 つであることを再確認し、大学あげて尽力することを新たに決意する次第です。